

健全學

五

十	武	9
7	2	9
5		

第四号



慶應丁卯冬新鑄

杉田擴玄端譯

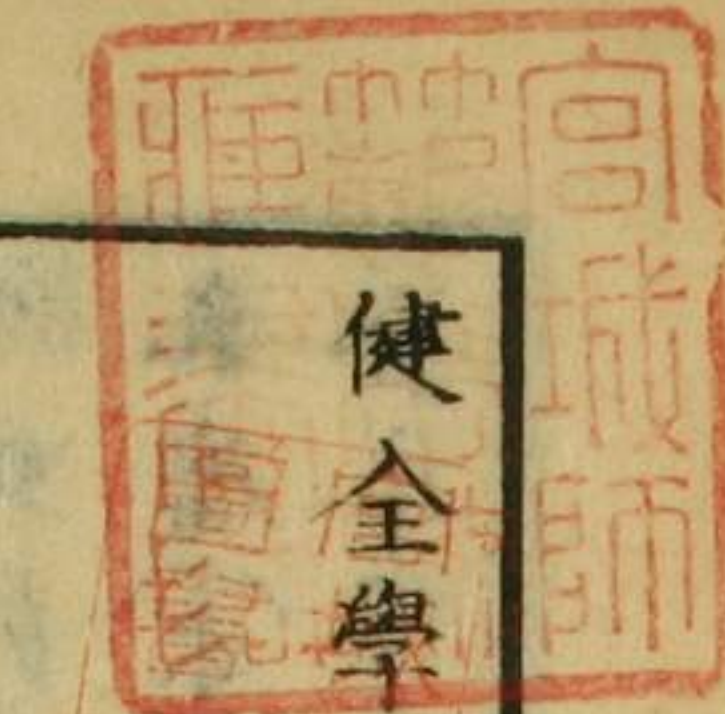


健全學

致高館藏版



健全學下編卷之上



杉田擴玄端



第十一篇 飲料の論

消耗する者返回復し元温を保固するが為小體中
採收する諸物ハ始小消食諸器の機關を以て先之液
流體とあすべし實は諸物ハ流體とあると見ゆ、小
窠の胞皮を透貫して全身に運輸するべく得るを

健全學

第十一篇 飲料

百五十一

武 729 5

○血球とても心より肺に至り、肺より再び心へ來り、心より又全身へ運行せらるる、血球の間へ在て游泳する「セルム」一名の流動質は要需といは、是故に動物の體中へ在て運輸するところ、必要とする處へ必ず此の流體あるなり、

凡、身體自然の良能は各部へ固有ある良好の流體は具備せ、而して諸物を運輸するに要する用なる流體は必は透明ある清水なりといふ、

乳糜(未熟の血)中より生機を保續せんとす諸分水と混合して一種の溶解をなす、血中より離子、白質及び線

質溶解をなす、又、排泄諸液は惟其排泄するべき物質は游泳せしむる水液のみにて成り、

體中より燃燒すべき水素瓦斯の一分は酸素と親和

して水へ變じ、窒素を含める筋質は分離して「アムモ

ニア」を生じ、且直に其「アムモニア」の排泄をなす、易に

らむるがため之は水中へ吸収せ、

炭素の燃燒するより生ずる炭酸も亦一部は水へ溶

解して體外へ排出し、又其餘瓦斯状となりて肺より

呼出せらるる部も亦同一の運輸物(水)を以て其生じたる

處より肺の小胞へまで來るなり、

若一個の流體他物を變換せば、只運輸するのみの用
 不充つべしとせば、其流體其運輸すべき物質と抱合を
 するべく、各々各個獨立するは要す。○水は能く諸物に
 吸収を盡し、雖之と抱合するべく、能はば、此抱合す
 るべく、能はざるの性、淨水に於て最甚し、此を見る、
 水を運輸し於るハ中性にして止り、其運輸する諸物の
 性を毫も變ぜず、只諸物に對して中立を以、又運輸
 を容易としんが為、免能く諸質諸分を混淆すと雖、其
 行旅に終期不ゆで、全く之を變ずるべく、なぐ再び採
 收するべく、得べし、(即曹達或ハ密尼沙と綠礬油と

混合するべく、復ハ曹達或ハ密尼沙に非ざりて、其
 混合より人の通知する、苦硝及び瀉利塩を得べし、然
 らば曹達或ハ密尼沙と水中に混合するべく、少く
 も其質を變ぜず、其水を再び全く(譬へば蒸散し
 て)驅散すれば、直ハ曹達及び密尼沙其元體を還りて
 其性を毫も失ふべく、如し、
 水ハ體中に在りて運輸物として、其用を盡すの外、尚
 既ハ前にも論するが如く、内部の元温を順整し、その
 の用を亦充はる。○水は排泄諸機及び發汗に於
 てハ絶へば血中より之を採用すべし、然るも諸液の

運行ハ常ニ流動するものと成要するガ故ニ水の輸入ハ養分の輸入の如く絶へば必要とするなり。○人々宜く記憶すべし血ハ榮養流動の主能とするところ成若シ血ノ一て此榮養流動の二能一と缺くる事あるバ直ニ健全を損ずるに至るなり是故ニ流動ヲ保存するありと榮養ヲ保存すると同く誠ニ必要ありと成是を以て其要須とする時ハ方てハ時々水を要需と成るあり。○血其要勢を良好ニ且容易ニせんガ為ニ稠厚度ニ過ぐることを胃及び咽喉の裏面ニ異レ機運ヲ發する成以て其部の諸神經直ニ之ニ感觸

且之を渴の感覺ニ變遷するなり。○此刺衝ニ奮起せしめて胃中飲液を引く時其水分直ニ血脈の細管中其薄膜を貫透して吸収せしむる直ニ渾身の血行中小混淆し長途の廻路ヲ循行する成要せば諸腸乳糜諸道と通行して心肺ニ至り又再び心ニ至りて其後始めて動血脈及び榮養の毛様管ニ至る榮養する血分と共に渾身小周流し是を以て清水及び既に全く溶解する他の諸物惟水中ニ游泳するもの成亦血中の吸収するもの成の理あり。○血中の成分ハ人の常用する諸種の飲料ニ總て溶解の功ありハ畢

竟水よりあり、○諸飲料の溶解し、是を以て運輸し、
 又渴を消さるの功ハ、全く其飲料中不含有する水の
 量不關係す、是故に飲料中清水を含有すること多量
 ありに準じ、其功も亦從て大なり、而して其水分中既
 ち他の諸物を含有すると、之を體中ニ在て他の諸物
 を溶解するの功少く、是を以て之を用いて善良の目
 的不應むとあり、亦甚だ少く、然とも習癖及び
 生來の嗜好を變ぜしむる事件、許多複雑の飲料を用
 いたるあり、即ち麥酒、葡萄酒及び其他諸般の銳
 烈飲料の如し、○此諸飲料ハ皆其水小次て最大の

成分として「アルコール」と名づく流體を包含せり、
 「アルコール」ハ亞喇伯名あり、他の某物の名の如く此名
 も亞喇伯學者の用ゆる所より採用せり、○セ子一ノ
 「焼酒」及び「井スケイ酒」半より多く「アルコホ
 ル」液を含む「ポルト」ビルリ「マテラ」の如き強き酒類ハ太
 約全量の五分一「アルコール」を含有して百分中より十
 六乃至二十分を含有せり、○尋常の「ポルテアウク
 ス酒」佛蘭西の醇厚及び「萊尼酒」ハ「アルコール」の比例
 更に少く、又「ポルト」及び「エール」の如き強烈の麥
 酒ハ太約百分中五分乃至六分よりして時としてハ更

小多たことも之りくひ、○稀薄ある麥酒ハ「アルコ
ホル」を含まずと更ニ甚ど少く太約百分中ニ一分許
たり、

〔註〕督學「インストン」ハ諸種の酒類中ニ含めり純粹
「アルコホル」の比例を記載するると左の如し、

全量百分中の「アルコホル」

- 「ポルト酒」 二十一分乃至二十三分
- 「マテラ酒」 十八分乃至二十二分
- 「セルリ酒」 十五分乃至二十五分
- 「マルサラ酒」 十四分乃至二十一分

「クラート酒」精製ポル
アウクス酒 九分乃至十五分

「ボウルゴンガイ酒」 七分乃至十三分

「トカイ酒」 九分

「兼尼酒」 八分乃至十三分

「ムウセル酒」 八分乃至九分

「三鞭酒」 五分乃至十五分

右ニ記する所の者ハ英國にて常用とせり最良種
とせり○「ポルテアウクス酒」の右の如ク高比
例ニあるハ必定其最良種とせりに歸するなり○實
ニ佛蘭西酒の輸入ニ重税と征せりハ常ニ英國ニ

専ら最良酒類輸入すべき基本を考ぜり是英國に於てハ運送貨及び輸入税酒類の佳惡を拘りて同一ありを以てせり
自餘アルコホルの量ハ同種此酒に於ても葡萄採收の時節と間種の酒とに於て大小異なるありたり

蒸餾せし酒類の比例ハ左に示す所の如し
百分中含む所のアルコホル

英國にて其強弱を試驗せし為し蒸餾する者ハ
秤量 五〇 容量 七〇

「コクナック酒	五〇乃至五四
「リム酒	七〇乃至七七
「ゼ子フル酒	五〇
「井ステイ酒	五九
「麥酒ハ	秤量合一〇
「稀麥酒	一乃至一五
「ポルトル酒	三五乃至五五
「アロウンストウト酒	五五乃至六五
「苦味強烈の「エール酒	五五乃至一〇
「アルコホルハ水より	輕多しハ容量よりハ比例

更に大ありといふ

「アルコホル」ハ未だ植物の内機^{カラクリ}に變じて^{クミタマエ}聚合機性の^{スガク}態に至らざる純糖なり。○總て泡醸に至る人は性お
 りて「アルコホル」發生下を^ヒ諸液中におく必ず糖は
 るなり。○葡萄酒又ハ穀物の萌芽^ヒ發生する者^ニ熱湯
 と混する液中ハ糖の大量^ヒ含めらるゝ其味を以
 と容易不知る^ニ得^ルなり。○今此の如き甘味の液
 中^ニ既^ニ發酵^スする物品又ハ醇と混し或ハ其甘味の液
 中^ニ既^ニ自ら發酵物を含む^ニて葡萄酒の如く^ニ
 且^ニ之^ニ温を加ふる^ニに^テ其中^ニ包含する所の糖全

く變性を始むるなり。○糖ハ炭素・水素及び酸素の同量
 より成る者なり而して炭素十二分水素十二分酸素
 十二分と定むべし。今泡醸の時^ニ方^ク炭素の一部(四
 分)酸素の一部(八分)と親和して茲^ニ炭酸を生む^レハ
 其殘餘の炭素八分と酸素四分と水素十二分^ニ親和
 して新^ニ一個の聚成分^ヲなり復^ニ甘味^ヲを^シ却て
 酒精と名^クる^ニ異性と得^ルる物^ヲ發生^スるあり即^チ其
 許多の分子一併^ニ集合^スる^ニて^テ揮發竄透の美香
 お^シ燃燒^シ易^ク流體^トなり一個精神を昏迷^セル^ニヤ
 登^ルの功^ヲ具^ス通常此物を酒精若^クハ「アルコホル

と名く、

是故小「アルコホル」の各分子ハ酸素・炭素及び水素より成りて其比例ハ四・八・十二・即ち一・二・三とあるなり、糖の某秤量ニ於て包含する物質の秤量ハ即ち

炭素 四十二分

酸素 五十一分半

水素 六分半

總計百分

「アルコホル」の某秤量ニ於て包含する物質の秤量ハ

即ち

炭素 五十二分

酸素 三十四分

水素 十三分

總計百分

甘味の諸液泡醗ニ因りて鋭烈の液ハ變ぢると記々既ニ論説せしが如く、炭素某分と酸素某分と飛散せり、炭素も亦も酸素も亦も多し、又此二素の遊離するに方てハ必ず一機運を生じて液滾沸せり、其故ハ此二素の親和炭酸瓦斯の某量を生ずるに在り、○今後ハ残留する液中少々自然ニ水素及び炭素

の大量に含有す、是、酸素ハ多量ニ炭素ハ少量ニ飛散して水素ハ毫も飛散する事あり。○此新生の酒精ハ素糖より作り一時ハ自ら酸素を含まず、少糖ガ故ニ(漿粉)ニ在ても亦同一と云、蓋シ漿粉も其成分ニ於てハ糖ハ全く同トければ(酸素)と親和せんとするの機能も亦更ニ大なりと云、言成變換して云ふと云々、糖若くハ漿粉より作り一時ハ更ニ焚燒の性甚しきなり。○アルコホルハ其秤量百分中ニ燃燒質六十五分、即、炭素五十二分と水素十三分を包含すとも、糖ハ只四十八分半、即、炭素四

十二分と水素六分半と云、包含せり、此燃燒し易き流體アルコホルハ其分の糖ハ更ニ聚合體となす由て之を得、且、一異名を以て貴重なる者として特ニ水と混合すべきの異性あり、但、清水と好んで和する液以て少くも水混ぜりて之を得る事甚だ難しと云、○世ハ純粹アルコホルと稱する所の者も尚、常ニ百分中ニ水二分を包含せり、アルコホルハ其水と和する事好むる性あり、許多の物品を浸す時ハ火を以て乾らすが如く全く其物品中の水分を吸収し去るなり、○若、夫、肉或ハ動物

體中の他は物體を酒精中に投入し置く時ハ酒精其
 織理より水分を吸收するを以て其物の收縮する去
 と恰も燥熱の地に置く如く爾後復た物質ハ其他
 比變化を起すべくして其物復た溶崩腐壞し傾
 くありたり○纖維乃質より水分を除去すれば生命
 全く遏止する者ふ於ても決して溶崩を起すこと
 此の如き者自然に起るともハ溶崩忽ち起らんと
 するあり○今學理に據るべく酒精の右に如き性と亦
 必要として採用せり譬へば解剖する身體の各部は
 久しく貯ると要するに於て之はアルコホルを浸

漬すは何年を経るとも之は貯蓄して生徒教導の
 爲と多しと心得べし此の如くも諸物は世上ハ
 強く水浸キソトルと名く
 今アルコホルの此乃如き性を胸憶し記するに於て
 鋭烈の飲料を胃中に容るれば其様子の事件起るを
 きやを更に能く了解するあり得べし○アルコホ
 ルと水と共小甚だ稀薄なる流體なり之を能く混
 合して同齊し用ひるは直に毛様管の衣膜を貫透し
 て血と混合し更し稠厚なる物質ハ夫より分離して
 固形の食餌と混合し胃中に残留して消化し或ハ排

排泄あせたり、○「アルコホル」一回血中へ入るとして、
血行と共に身體各部へ循行して以て各部に其機運を
覺へしむ。

但し此可燃液アルコホルハ血中へ在て天然必須の成
分あり、又下級の獸類に在るハ決して血中へ在る
ことなく、人にして於ても亦幸ありて必は血中へ存する
ありとす。○方今奢侈強盛の世に於ても千万人中へ
も其健全存活の間ハ決して此液を一滴も血中へ入
るる者あり、○然れども「アルコホル」ハ必ず血中
本然の成分に非ざる故に一回血中へ入るとして

必は彼此の分子を以て之を排除すべしとて、此物
只無用(且無害)の刺分たるものと、尚之を排除せ
しむを得ずとて、其故ハ此物動靜血脈中へ吸収され
る時ハ、限定せざる有用分の為に要とす。蓋し地を掠奪
すべきを以てあり、又身體諸器を造成する為に、此
物無用な屬す。是、此物ハ(線質の如く)造成固形の性を
有し、是をとり、人宜く之が為に必須あることを、含窒素物を
るるとして記憶すべし。然ども「アルコホル」ハ他の事件
に要需あるを、此物ハ血中の燃焼質と殆ど同しく
燃焼するものと得べくして血中へ入るとして亦燃

燒す。或得屋といひ、○アルコホル糖中不在る酸素の大分は消耗する。故に其残余の分準して酸素と親和するの性大なるを見たり。又アルコホル中に炭素及び水素は呼吸に因て吸入する酸素と和すれば常に温液起して炭酸と水とを生じ、肺より蒸氣となして體外に驅散す。此の如き式を以て血中より酒精の排除するは、恰も血中に入る時の如く其速あり。まことに實に驚異多し。然れども其體外に排除するの機は自然其處に現在する酸素の量に關係し、又燃燒の機力不關係す。乃ち知る吾人爽快の大氣中に在るは

甚しく運動多し。故に狭隘して大氣通ぜざるは居室中に在るより甚だ多量の酒不堪ゆる。故に爽快の大氣中に在るは酸素多きを以て之と親和する。甚だ大なるに因るなり。但し速に之を疑問起す者あり。曰くアルコホルは之を飲めば直に再び排除すべき者を造るは、大害をあたると。たゞ殆ど中立を成べしと。之を答ふるは、左の如く曰くアルコホル自ら燃燒する間、他の成分の燃燒を妨ぐと。○今アルコホル中に一片の紙屑を蘸して之を火焰中に致すと、紙屑をアルコホルは直

小燃えて消失すと雖、其紙屑ハ暫時損するにすぎない
 るを以て此ハ唯香水「オード」を以て試み知るべし又
 燈に於てハ其油櫃中ニ絶へた「ホル」燒酒を
時始メ出で來り液あり、因て「ホル」「ホル」蒸餾を
「ロ」「ロ」と名く蓋し前行の義なり、或加ふれば棉線
 製の燈心火の為小燒燼をもちあふなり、蓋し「アル」コ
 「アル」コハ酸素を悉く已む方より引かんとする程ハ酸素と
 強く親和するの性ありなり、○今「アル」コ「アル」コハ人身の
 血中に入りて他の燃燒質と混合するも然も、亦之と
 同一き事發生して「アル」コ「アル」コ自ら燃へる間ハ他ハ
 物質を燃やししめたり、是「アル」コ「アル」コハ肺中より來

る所の酸素を悉く已む方より引く故ハ尋常酸素の輸
 入を以て血中ニ燃燒すへき諸物を「アル」コ「アル」コ尚ホ燃
 燒する間ハ、變換するも亦く止まらば要すもハな
 り、○胆汁其他更小稠厚の物質ハ自然の良能身體以
 温保するが為ニ設けらるる燃燒質なりと、人若し自
 家の嗜好を以て他の甚と揮發ある燃燒物酒精を體
 中より輸入するるときハ、其自然の燃燒質體中より蓄積を
 るを以て、血中より許多の蓄積を生じて周流中適宜
 小之を清利するも得ず、生體の全機平準を失し、
 且事態自然より反する故ハ、一異比良劑を用ふべし

を得少るに至り或ハ避くるを得るを得る障
 碍及び疾病を起すに至るべし。○今強烈の飲液を用
 りて其内ニ在るアルコホルヲ於て既ニ食用せる
 他物よりも速ニ燃焼せしむるの外、別ニ搜索す
 るに理ありと雖其アルコホルの量ニ適する粉末類
 若くハ脂質此食物を過むるに非ざるハ決してアル
 コホルを用ひざる以て良とせん。○葡萄酒或
 ハ強烈の麥酒を日々適量ニ飲むるとハ必ず脂又ハ
 蒸餅其量ニ代用せざるを得る。決して其食物ハ十分
 ニ併用せん。若くハ此事件ヲ忘却するべし。

必於身體ニ疾患を起すなり。但し此法則不用心せら
 るるときも尚ホ即今論説すべき他の理ニ因りても酒精ハ
 連用せらるると必ず患害ヲ起すなり。
 今先、始末アルコホルの誤用を説示し、尔後其日用
 小因て生ずる續症を左ニ論述せん。
 若く酒精血中ニ入ると呼吸氣小因て驅散するより
 多量ありとせば、此物自然體中ニ蓄積して全然た
 り異症を發するに至るなり。アルコホル其始め體
 中ニ入るときハ至る處の諸器を強壯して心ハ搏動
 急疾小なり且強烈とありて、皮膚ハ温暖となり蒸發

氣盛とあり、分泌諸器ハ常より大量ニ諸物と分泌
 し、顔面熱して活潑となり、眼目光亮ニ精神爽快と
 あり、此諸症と總く其初發の徵候たりとも、忽ち右の諸
 症よりと許多の症を發するに至るあり、即ち考慮特小
 自由となりて言語急疾ニ發せしむとも、其言語考慮共
 ニ智靈を以て適宜ニ調理する者とも思われざるを
 ぞ○復た考慮を具思ふ目的よりと接続するべく能
 つたして妄想全く純正の考案ニ代り遂に靈才も全
 く消失せらるに至るあり、
 支能と簡古小論すと、精神の高カ即ち辨識及び謹慎

の能他カ派刺衝すると同一作用を以て妨碍を受け
 腦・神經の質身體他部よりも多くアルコホルの爲ニ
 侵襲せらるる是此支ハ特小強烈飲料を多量ニ與へた
 る獸類ニ於て親驗する所あり、而して其獸其後直ニ
 死ニ至るるに於て其腦中同一大の他部よりも多量
 ナルアルコホル有る派歴驗をり、然とも神經の質アル
 コホル派包含せらるるに於て、神經之ニ由て患害を受け
 其アルコホル存在するの間、其官能派切實ニ受け
 ると能はざる蓋し神經も猶筋の如く其機關ニ於てハ
 物質の交換派以て本分とするが故ニ、血中ニ包含し

く神經不迫來る酸素其地より酒精と會するときはハ復て其成分より自在なる作用返るすこと能はば其故ハ此の如き時不在てハ其親和殊に酒精の不在を以てなり○神經節の最靈最微の部即ち智靈の所在ある腦髓最初に此患害を得るを以て、許多の考慮續出するは異常に急速なりと雖、是非を辨し且熟慮するは能はば凶失せり、アルコホル血中に入るときは、酪酐の初徴を見しと左の如く、即ち血行急速となり、顔赤となり火の如く精神勇壯となり、言語爽快とあることも多少譫語を交

ゆるなり○右の諸徴見らるる時よりアルコホルの輸入返過むるとは、其揮發分徐々血中より呼吸を以て驅出すが故に、腦髓及び神經の質は固着すはアルコホルも亦消散するに至るべし此の如き事起るとは、其甚しき刺衝を受くる諸器其刺衝物放棄の多きが故に、諸器弛緩して脈弱となり皮膚乾燥し、分泌機急慢し、精神多少痴鈍をあらん然とも少時休息又ハ睡眠するときは、其惡症少し宛回復して身體再び常態に復るなり、然とも右の諸徴(考慮錯乱)見れて後も、尚新にアルコ

ホルを血中へ送りて過まざるを、神経の質不致
せし患害其他部不まで及び、先脳髓全く其官能
あり能く、能く、辨識及び謹慎の能全く消失し、先
ハ貴重なる智靈を以て一身の總理せし人、今ハ更
下層に在る脳髓の麾下に屬する以て、嗜好情慾
及び粗厲ある知覺諸器の管轄を受、之を喻つて、曾
て智腦を死歎に如くし、あるたり、然とも其毒漸々不
靈活微ある知覺神経を侵襲するに従ひ、嗜好の能力
も亦消失して昏冒、異聲異視、其他許多の迷誤を生じ、
兩眼光減失ひ、面色淡白となり、諸筋顫振して縮力減

失ひ、四肢其用不適せば、何の處あるも擇ふるを、
扶柱するを、能く、地上に倒る、是醉客の尚有
害液を服さんとす、或過ちる自然良能の最上方術
なり、
今此地に至てハ、急變の事發生するや、宜く之を理
解すべく、又宜く其實情を述べ、即ち一個の全く醜
陋なる人々最危険の中、在りて其景況毒藥を服そ
る者、齊し、力強く意旨なく、又人事を省するを、
く、一回落るるを、復た歸るるを得ず、深淵に臨
むが如く、時として、毫髪の差異其落るる否

けり事と成定むる、身體の諸器を麻痺せしむる乃
 兎機不在るハ、人莫不省をして後來死に至らしむる
 こと、屢治滴の多少ニ關係する例證少しとせざるを
 了、
 「アルコール少量少ても血中へ入るとハ、既ニ智腦
 及び覺腦を麻痺せしむるか如く、脊髓の神經をも亦
 麻痺せしむべし、而して呼吸諸筋を運動せしむる者
 も此脊髓神經をさぐ故ニ、呼吸も亦過むるに至ると、血
 ハ清潔ある動脈血とあり、不潔の汚く動脈中
 へ輸入し、微弱なる心動二三搏保續して、全く其運行

成廢絶とせん

若し人居常「アルコール」を體中へ輸入して過すころ、時
 ハ、必右の症を發するに至るべし、然とも全く酩酊
 せしに至るころで、宴飲する許多の酒客も、此最後の死
 症を免るるべし、但し「アルコール」の毒ハ其性揮發
 あり、成以て醉客ハ人事不省中他人より尚、其口へ銳
 烈飲料を暴勵し注入す候時、其人の死に至るる成
 見らるる事も亦之あり、又其注入るく又人莫不省とあ
 るに因て、飲酒も亦止むる、雖、既ニ飲服せし「アルコホ
 ル」小因て、覺腦及び智腦ニ於てする、如く、脊髓實小

妨碍を受くるも亦之あり、是之に因てハ呼吸過
尋で死に至るなり、

但し「アルコホル」の因て生ずる人事不省は由て、右に
如た大危険を幸うして逃るゝとあるも、復て全く
死を免くはせずして只暫時免くはたすの難件あり、○
人常は「アルコホル」を飲服するの習癖あるは、早
晩右の症を得頓漸其地に至るなり、○近世ハ衆人甚
た勉強して人生の記録を作て、即衆人の死生を精細
不記し以て其死生の況則死學ふるを得る法あり、
其後其事ハ熟せる者之を檢點し、且更ニ研究し之ハ

因りて許多の適當なる證據を得たり、方今文學昌盛
かゝれ世に在てハ、人生の長短ハ關つる原因を知て
得るべく、往昔よりも切あはば、其年齢の人ハ尚幾
許年生活し得べきを測算せしむ、若夫其人の撰
生及び習慣を全く檢査するべく得る、其審査數多
の人、其まで及ぶは、最其實を得るに近き者とい
○今耽飲家と適宜ある酒客の生命の長短を測算せ
ば、其中數如何あるや、實ハ左小出すが如くなるか
で、即適宜なる酒客年齢二十歳の人とするべし、其
人の遭遇をば、き災厄及び身體の病故を拘らず、尚

四十四年生活すべしとの妙理あり、然るに耽飲家の同
 齡ある人ハ、約するに尚、只十五年生活す人き餘命あ
 るのみ、○今一個の強健ある少年防後會に入ると年
 年其保人ハ某量の銀を交し置り、其死するに臨んで其
 後嗣ハ某量の銀返給せん、と云ふ望むあり、
 不、其會主たる者其會に入ると人の時々銳烈飲料を過
 せしを知る、と云ふ、其保證銀を以て甚ど難し、
 其出銀更に多し、
 一、其故ハ年來の經驗を以て之を學ぶ、
 て之を考究する、右に如し人ハ外面強健に見ゆる

と雖、實ハ既に死者ありて其習慣を息むることあり
 間ハ、いづれまでも死者あり、
 吾人預め之を鑑みて飲酒を娛樂とせず、
 蓋し飲酒ハ娛樂とあるを以て欺きて却て之を
 得ず、
 自ら毒を服するに同しく、又墓門不遠しく、
 時として其人自ら不摂生を行へども、自然の良能之
 代善路不導なく其危難を免る、
 然ども娛樂に迷ひ二十歳若くハ三十歳して其表見
 の娛樂不身命を拗つ者多し、

「アルコホル」の害をなすは直に死致さずと雖徐々
 として身體に損害をなす諸景況相輔奏するあり、他の諸
 件ハ明白に論すべくは、雖左の件々ハ甚と明亮
 小之は見るより得べし、即ち血ハ銳烈の飲料に因て
 稀薄となり、造成をなすに適せぬ又線質の聚合弛緩
 して強剛とあり、且血ハ生活の流動物をなれば其他
 の所由小因ても亦不潔とありたり、○「アルコホル」ハ
 其有害の質を以て要須ある物質の領すべし、地ニ充
 實し、且炭素性の物質及び燒化を要する他の燃燒質
 の排除中も亦妨碍をなすは、是「アルコホル」ハ其要用

をなすは、氣中の酸素を特より取り、尚血中
 に在るの間ハ、其不潔分は血中より除却せらるる能
 はず、然して以てなり、又「アルコホル」を含有する各部ハ甚
 しく膨脹して常態を要とするよりと、許多の機運を
 なすべし、又「アルコホル」と相接する生體の軟弱部「ア
 ルコホル」の爲に燦衝及び熱を起すこと、アルコホ
 ルハ直に生命を棄ふこと、雖諸般の式を以て
 健全を損害するに適する諸物は周旋する事あり、
 是、實に身體の健全ハ身體は集成せる天然の機關
 を全するに在り、其諸機良好に合同するに時と

して千百の細小事件に關係するところあり、是を以て直達の妨碍日々現れ、来る時不在て、其損壞幾何の知る處なきに

「アルコホル」ハ多量に用ゐれば病を起し、又死を致す者ありを以て、配飲家へ自ら死を招く不當なるものと毫も疑ふべからざる所なり、是故に今有害なる「アルコホル」の大量ハ何れの地にも留まらざることを知るべきに、是を緊要にして、又之を少量に且甚と稀釋して用ゐる時も、尚有害なる處を理解するべく、肝要なり、○衆人日々の經驗を以て思ひらく、酒類若くハ鋭烈の麥酒

を晝食の時適宜に用ゐるべし、アルコホル毒に中る者も於て驗する如き大害ハ決して免るべきならず、然とも是より由て未だ有害症の憂減全く免るべきとあるす處より、是を以て我輩今甚と稀釋せる「アルコホル」即ち葡萄酒、鋭烈の麥酒等日々用ゐるに由て既に確切に知を得たる所なり、茲に説示せん、○第一「アルコホル」ハ他に加味する物ならず、ハ栄養の功なり、是を以て身體各部を造成するに要項とするものとあり、第二「アルコホル」ハ水の如く他物を溶解するものとあり、或ハ水と混合するも、栄養分を溶解し且運輸するものとあり、

と單味の清水に如く、是を以て「アルコール」ハ幾許
 小量に用ゐるも、飲食消化に於てハ無用の物なりと
 せ
 但し身體に要須とする温氣起すハ少量の「アルコ
 ホル」を以て甚ど適當とせべしと云者あり、如何、曰く
 否、其故ハ「アルコール」の身體に入ると直に燃燒熱氣
 云々を起す、他物に先ずてを以て「アルコール」を起す
 べきハ、他物も漸々ハ燃燒して且「アルコール」よりも良
 熱氣を起すべし、却て「アルコール」の爲に妨碍を受け
 尚且「アルコール」は燃燒して身體を温煖に起す、他

の燃燒物油脂・澱粉に代る、雖も他物の温煖に劣る、
 其益する所少しを以てなり、○「アルコール」の燃
 燒に實に油脂よりも迅疾ありと雖、血中に起す可レ
 温小至てハ他物よりも少しと云、油脂一斤を以て體
 中に發越する所の温ハ「ビネール」穀物より燒酒二斤
 半に以てするよりも大なり、アルコールハ性迅疾を
 有し、雖温氣發越するも少し、先づて酸素と親和して
 他の燃燒物を傍側に遣はると雖、遂に之を算定するに
 方くハ温氣生ずるとして却て少し、○若し人銳烈の飲料
 又ハ強壯酒を飲めば、實に其體熱灼する所覺ふ然し

と此熱灼ハ殊ニ「アルコホル」ハ神經質刺衝を起し因
 く血運急疾とありより起るを以テ諸部常ニ反して
 甚しく尤進するあり、○此熱灼ハ太抵飲を直ニ覺
 ゆるあり、是「アルコホル」ハ飲食消化の道路ヲ經じ
 て直ニ血中ニ吸收さる、故なり、然とも其理と齊
 しく其熱の去るを亦至る速なり、即「アルコホル」
 體中より揮發する後ハ、血行益徐緩とあり、故なり、
 又故ら小身體の運動ヲ催進する後ハ、其體常よりも
 冷ニ覺ふ、此の如き時ハ人常ニ「アルコホル」を飲ま
 之ヲ救つんと欲す、此諸件ハ因テ人其體をして刺衝

おろし、漸々小自然の常機を全ふするを以て能く
 此に至らば、
 是故ニ「アルコホル」ヲ包含する飲料ハ假令甚だ稀釋
 すと雖、左の三件あるが故ニ、日用するごとク禁ずべ
 し、即「イ」アルコホル「單味」にてハ、營養の能力少し、之
 ろ、(ロ)アルコホル「ハ他の食物の營養分を單水の如
 く溶解せし、又運輸するを以て、(ハ)アルコホル「ハ熱
 ヲ起すと雖、他の燃燒質の如く甚きことあり、て
 之ハ燃燒せんとする地位ヲ棄ふ、
 然も「アルコホル」ハ身體上ニ如何の作用をあたすや、

曰く、アルコホルハ其通過する所の生器或更ニ興奮
 せしむ、即チ二蓋の好酒・飢餓或起して胃の消化機を
 旺盛とせしむ、是より由り心悸甚しくなり、且精神も壯盛
 とあり、但し右の式小據して諸機旺盛するも假令幾
 許僅小なるも必ず後ニ衰弱を起さべし、○我輩既ニ
 身體各機ハ其状態イカヤウ如何なるも必し彼此の物質消耗
 するより起るるを以て理解せり、是を以て各機亢進を
 受くる其消耗も亦大あり或知る、故に甚しき刺激
 受くる器械ニ再び尋常の彈力或回復せん、其
 器械尋常の式小據して機運をせしむ要するよりと

久しき安息を要す、此ニ於て假令少量なりともアル
 コホル或日用する習慣の有害とせしむるは或知るを
 了、○胃・腦髓及び心臓・整齊ニ其官能をなす間ハ決
 る之或衝動するに要せし、然るに何の故或以て既ニ
 能く消化の機運をなす胃腑ニ消食する為の刺激を
 與ふをせしむ、此式小據して其既ニ健全あり或更ニ健
 全とせんと要するに或るは、却り疾患を得均準を失ふ
 り、他事ありとせしむ、
 若し一二の器械絶へば療藥或受くるに或るは、速ニ其固
 有の機括を失ひ、人為の刺激ニ委任するに至り、此

の如くして進む行くときハ其器械漸々ハ刺衝不習
慣して療薬も復た其効をなさば多量ハ與へばれを
能ハざるに至るべし、

右の事件ハ酒癖ある人ハ於て常不驗する所なり、今
毎日酒二鍾を飲むと云々始むる人、毫も妨害致験を
致さくなく、速ハ六鍾を飲むと云々得るに至るべし、
此れ如く進む行くと云々、其人速ハ二鍾の酒を用ゐ
るを得るに至り、且曰く、此量想ふハ他人より有害を
受くるに、今や身體少くも酒の害を受くると云々、
程小之ハ習慣せりと、今之ハ轉して左の如く言ふ

と云々得べし、今汝の體自然の常機を變たり是を以
て「アルコール」の大量些の運為をなすを見ざる、汝
の體既ハ其損害致受けとありし、○我輩少量の「ア
ルコホル」を用ゐるに、胃の機能致盛し、て「アルコホ
ル」致用をざる時よりも許多の食物を消化せしめ、
を知らず、此の如きときハ急變様の事致生ずるや、曰
く、血液其要須とするより血管中ハ多量とあるを
し、其故ハ「アルコール」を用ゐるに、曾て饑餓を覺え
し、其故ハ「アルコール」ハ、自然の常態榮養を過分ハ要せざる
の一證をば、即ち身體ハ貯蓄十分あると云々、饑

餓の過ゆるハ自然の定規あり、

是故、刺衝を以て饑餓を起せば人為の多血をなす、
身體各器時々刻々蓄血を生じて遂に激衝を起す
不至り、分泌諸器其機關を重複せざるを得ざるなり、
其故ハ常に排除せざる必要する無用の剩物此外人為
の饑餓不因りて體中致せざる者ありて造成質とな
らざる剩餘の食物をも尚排泄するを以てなり、○
今アルコホルハ其分泌諸器も亦運為をなすべし
と云ふ之も亦大過の機力を増進せん、然とも此ハ寒
ハ一瞬時の事ありて上も云へる如く、大過の機力

ハ必、後ハ勞倦を起すが故、其安息も亦倍加する
必要すべし、又安息するべくなく身體も必要するより
も多量の食物を美味し食らんが為、更に饑餓亢進
て過もざるを、其身體必健全を傷害せん、アル
ルコホルの作用も由りて暫時胆汁過多く泌別する
肝臓ハ漸々其刺衝を多し、胆汁を分泌する能力
失ひ且日毎衰微に至るなり、○若彼此の生器其
自然の常機よりも盛ふ運管をなすがため衝動せり
るゝと、其器暫時の間も能く之も順從するが如
く、雖、忽ち衰弊に至り、且、渾身も早晩必ず衰弱

致さるる

日々食膳小美味の物に備へて其胃中より多量の食物
 及び填て且一満鍾の酒を多しとせば飲む人ハ漸々
 彼此の疾患を準備するに齊しくして其疾患必し數
 年の後一時に發起すべしと云ふ○若其人學問の基き
 造化の告示する法則に検査せば總て些少の前徴
 をも意を用ひて其大患に至るを免うとせたるあるを
 然るに今其人醫を招きて之を已む數年の懈怠
 一時に回復せんやと云ふは且甚と劇感し發起せる
 胃瘕・肝臟病及び腸患を除治せんことを希ふ豈得べ

かんや

上文説く所は基本として健全ある人の為は小量
 よりもアルコホルを飲むよりハ寧ろ全く飲まざる
 法則に良しと採用せざるを要すべし○若夫アルコホ
 ルを極めて小量且極多を稀釋し用ひるとは身
 體の常機其些少の毒を排除せんこと全く確して
 稍有害と云ふ前ふ之を除去するは得べしと云ふ
 但し其排除容易く之をす得べしと云ふも必し健全部
 在て些少の奮激を要す蓋し此奮激ハアルコホル
 用ひられバ之を起すに要すべしと云ふ身體を造成す

るゝと温暖を起はるとに用ゐる者たるも、今只其無用の剽物ヲ除くに之を要するなり、
 但し右の諸件ハ關係セバ「アルコホル」も時々してハ實ニ有益なることあり、即チ其刺衝を大利益とすゝ用ゐるを病症ニ於ては如し、此の如き症ニ在て乃「アルコホル」の服量及び用法ハ、其昏冒・酩酊の功ヲ奏せざる許ハ之ヲ與ふるニ在て、而して一ハ之を用ゐれば其内含する精氣速ニ酸素ニ由て燒化し、一ハ其刺衝の功只ハ其大衰弱を補ひ、且其生力の平均ヲ失ふ者ハ回復を促す、是を以テ險重なる熱病を患

ひく後回復し赴くんとする者、酒ヲ用ゐて屢全治不至るゝと、敢て疑ふべし、○右の如き症ニ於てハ造成の全機暫ク廢絶するに因りて血氣乏しく、一時消食機を催進し、或ハ一時血中ニ揮發ある燃燒質「アルコホル」ヲ輸入して害ヲ免はるゝ許ハ之を補足する、○身體衰弱せる者も總て右様の熱物及び饑餓ニ由りて食する物ハ最ニ好く堪ゆるゝと得べし、然れども「アルコホル」の某疾病ニ要須なる性質必ズ常症ニ害ヲ及ぼさざる性質あるものと遺忘すべし、此の如き症ハ「アルコホル」ヲ用ゐるハ

其病名を多しと欲得られ、宜く醫藥と用ゆること
 となりぬべし。○總て疾病は醫藥と用ゆる所の者
 と健全體に用ゆると、必は變化を起すべし、而
 て健全體に變化を起すと、必ず、疾病を起すべし
 と、○健全體は、一の變化は、要せば、只自然の良能
 に任する。一、或は要を多し、

今飲料を論ずる末章に於て尚記すべし、要を多し、
 麥酒は葡萄酒及び鋭烈の飲料と全く同列をなすべ
 し、
 一、事なり、即ち第一麥酒は葡萄酒或は「セ子」
 「フル」より「アルコホル」は、含むると、少く、第二、麥酒は

本來の食料とあり、
 ○燒酒は蒸餾するに方てハ糖質總て「アルコホル」は
 變遷すとも、麥酒を醸造するに方てハ其完成し、至
 る迄糖質溶化も、
 養の功を具せりと、然とも麥酒中ハ右の食料とあ
 るべし、
 一、
 の各部に固着する、
 ひ、
 と、

加糖・シヨコラード及び其他此類の飲料も麥酒の如く
 榮養の功ありとも、右の如く純發の後患あり、是を以
 て常水より全く他の飲料飲用せんと欲すバ、酒若く
 ハ麥酒より右小記載する諸飲料飲用せざるを以て
 更ニ智と云ふ事、

近年健全體小「アルコール」飲用せれば如何の繼發症
 あるや發檢査する事、甚だ勲勞たりたり、是
 小由る大小發明を得たるあり、即チ千八百四十九
 年印土の麻打拉薩ニ駐劄する歐羅巴軍中少も酒
 類飲用せざる兵士一歳中ニ五百人よりして五人死

少一宛之飲用せし者一歳中五百人よりして十一人死
 し、無量ニ用ひし者一歳中五百人よりして二十二人死
 せりと云、然れば此亦も明證とすべく足る、又何の地
 小於ても此の如く之を發檢査せば能く之を知る事、
 發得べしとす、是現ニ目撃する所の事ハ議論よりても
 確實なるバあり、○右の事件及び其他乃實驗發以る
 するに、幸小健全なる人、更小健全を保護せんと要す
 る時ハ、飲食する所の物を務めて減らすに慣れ、且飲
 料中、特に「アルコール」發含多る品を慎戒し、其良を
 る事と決して疑を容る事なく、○少年の時より大

食を以て胃を損ずれば、又「アルコホル」を消滴を血中に入らず、こゝろかやゝ者ハ、之より因ての既ハ人間に在り、許多の疾患と成る事、起因以免うるをわら。

健全學下編卷之上終

